



花が早く咲けば

温州みかんの収穫と出荷が目途がつき、農家もスタッフもお正月前後はちょっと一息ついております。愛媛のみかんは年内までの早生、中生が多く、年越しの晩生みかんはほとんど作っていないのです。今年のみかんを振り返ってみると、色づきがとても良かったことが特徴的でした。いつもの年であれば11月初旬の出荷スタート時にはまだ果皮に緑も残り、出荷担当者が農家と収穫スケジュールの打合せをするのにいつも着色の度合いが問題になるもの。農家も色が進みやすい樹の外周部からハサミを入れ、残った果実は日を改めて収穫する分別採取を行います。ところが今年に限っては、10月の終わりにはみかん山のオレンジが強まり、最初の収穫からよく色づいたみかんを樹全体から採ることができました。こんなに色づきが順調なのは珍しいことです。果実が色づくのは、緑の色素が退いて黄や赤の色素が強く現れるため。山の紅葉と同じような仕組みです。色づきを左右する要因はいくつかあり、一つは気温が下がること。気温が15度を下回るようになるとよく進むようで、この秋はちょうど良い条件に恵まれました。そして、もう一つ考えられるのは、昨春のみかんの開花がとても早かったことです。明浜では温州みかんの開花はちょうどゴールデンウィーク頃になるのが通常ですが、この春は平年から10日から2週間ほどは早く

ご支援ありがとうございました

ジュースの売上の一部を西日本豪雨の被災地へ寄付する企画を天歩9月号でご案内いただきましたが、おかげさまで549ケースお買い上げいただき総額10万を越える金額を集めることができました。皆様のご厚意に深く感謝しております。こちらは西予市を通し復興支援事業に活用させていただきます。

土砂崩れの起きた段々畑も、少しずつ修復が進んできています。もちろん「災害前と同じ」とはいきませんが10年後を見据えた復旧を目指し引き続き取り組んでまいります。

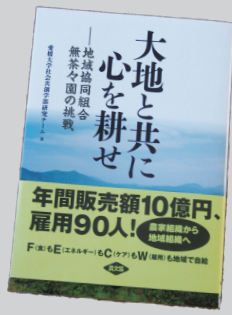


なりました。桜の満開も早く、そのまま急速にみかんの蕾も膨らんでいったような印象です。1月、2月と平年より寒い冬を過ごした後、3月、4月は逆にとても暖かい春となり、みかんの樹が堰を切ったように動き始めたのでしょう。開花が早いことによる影響はまだまだ続きます。まずはみかんの酸味が少ない仕上がりになりやすいこと。果実の酸度が一番高まるのは開花から70～80日後の7月頃で、その後は糖度が上がるとともに酸はどんどん減っていきます。開花が早ければ収穫までにこの酸が減る期間がより長くなるわけです。気候にもよりますが、最終的に果実が成熟する時期も早期化しやすくなります。ほかに蜂蜜の集まりに影響が出たり、農作業の適期も変わったりと、みかん栽培をとりまく様々な点に波及していきます。1月からはさまざまな中晩柑類の出荷がはじまります。伊予柑やポンカンも今年はとても着色が良く、こちらも熟期が早まっております。無茶々園の柑橘全体でみれば温州みかんが終わってようやく中盤に差し掛かったところですが、このシーズンは何もかも前倒しで進んでいきそうな気配がしています。昨年の花の早さは特別でしたが、温暖化とともに開花時期は徐々に早まっており、この地域の柑橘産地としてのあり方を変えていくことになるのかもしれません。

無茶々園の本ができました

愛媛大学の先生のご協力で無茶々園の40周年誌「大地と共に心を耕せ・無茶々園の挑戦」が農文協から2018年11月に発行されました。愛媛大学と無茶々園の想いがつまった1冊になっていますので是非ご覧ください。

ー以下 本文より抜粋ー
大津清次も切望しているが、本書が、広く有機農業運動と「村づくり」に邁進する人々とともに、生協やワーカーズコープをはじめ、協同組合運動に集う都市住民のみなさんに訴えるものがあれば、これに優る喜びはない。



謹賀新年 今年もどうぞよろしく願いいたします。

おかげさまで、今年で無茶々園は44年目の春を迎えることができました。これも皆様方のおかげです。ありがとうございます。さて、世界は北朝鮮の核の脅威が一時休止したかと思えば、米中の貿易戦争から軍事・IT・宇宙の覇権争いが高まり、一層紛争の脅威が増しており「アメリカファースト」が今や世界に伝染しつつあります。また日本においても、いざなぎ景気が戦後最長と言われていますが大企業は利益を上げながらも株主や内部留保を優先し、相変わらず労働者には恩恵が回ってこず、格差は大きくなるばかりです。いったい「なぜ働くのか?」「幸せとは?」「誰のためなのか?」もう一度立ち止まって、本当の価値観を、考えてみる必要があるのではないのでしょうか。先日、元沖縄大学学長の加藤彰彦先生のお話を聞く機会がありました。感動の涙が3回ほどでのお話でした。小学校の教師時代に「逆上がりの授業」があったができない生徒がいた。放課後、その生徒に同級生が自主的に教えた。できないだろうと思っていた生徒ができるようになった。生徒の手をみたら豆だらけ、この生徒に通知表の「1」はつけられないと校長にみんなオール3にしていいかと訴えたが叶わなかったので先生を辞めたそうです。北海道に人生修行に出られた際には、どうしても人になつかず縄でつながれている馬がいた。かわいそうだからと縄を解いて自由にしたところ、その馬が仲間と認めてくれて乗れるようになったとのエピソードも伺った。動物も人間も同じなんだ。認め信頼し合わなければうまくいかないのだ。そして加藤先生は「共に生きる仲間がいることが本当に自立していることだ」と言われました。無茶々園の目指す「自立した地域」とは、「共に生きる住民が沢山いる」ことであり、無茶々園の取り組んできた地域づくりが間違っていないことを確信できた話でもありました。改めて、自らの生き方、働き方に対して考えさせられるものでした。人間の多様性を認め、個性を生かす時代なのかもしれません。

2018年を振り返って



無茶々の里は昨年もいろいろありました。7月の豪雨災害は甚大な被害をもたらしました。床上浸水7戸、床下浸水12戸、車庫車14台、園地被災198か所(約3ha)モノレール被害81か所(動力28台、レール1440m)などでした。幸いにも激甚災害指定を受けたことで農業被害には9割補助が認められ、復旧は6割程度進んでいます。そして、消費者の皆様はじめ、お世話になった方々から多大な支援と励ましのお言葉を頂きました。支援金につきましては、生活インフラ支援、園地被害の復旧補填などに使わせて頂きます。本当に産直をやっていてよかった、消費者のみなさんや取引先の皆さんとつながっていてよかったと実感させられました。本当にありがとうございました。先の加藤先生の話の中にもあったのです

が、災害を経験したことによって出会いや気づきがあり、心を揺さぶられる衝動がありました。(涙が止まりません)一方、本業の柑橘生産では、温州みかんは豊作年でありましたが、7月の豪雨災害、秋の高温による浮果皮による精品率の低下で平年作でした。伊予柑、ポンカンなどは不作年にあたり、今年もまた農業の難しさと技術の未熟さを痛感させられた年でもありました。福祉事業では、4月1日から学童保育オレンジクラブを西予市から委託され、いよいよ子育て分野への挑戦が始まりました。12月には、リハビリ特化型のデイサービス施設「こはるの里」がオープンし、訪問介護サービス、介護タクシー事業も同時に始まり、地域の必要とされる困りごとを事業化する取り組みが進み始めています。

2019年の取り組み

10年前に片山元治さんがベトナムへ渡り種まき運動をしてきた取り組みがやっと芽を出し始めました。日本で実習して帰った実習生たちが野菜を作り、ホーチミンのイオンや高島屋の店舗に安心安全の野菜を販売し始めました。そして、コシヨウの生産も低農業ではありますが帰国実習生が始めました。2019年3月には無茶々園でも販売を開始したいと考えています。いよいよ無茶々園版国際産直の始まりです。



ベトナム産のコシヨウ。今年が目玉となるか。

2019年は、30年続いた平成時代は閉じられ、新しい時代が始まる年となります。無茶々園の活動が問われる年になるだろうとも思っています。従来より掲げてきた「F(食料)E(エネルギー)C(福祉)W(雇用)に、H(住環境)の自給できるまちづくりを推進したいと考えています。特に「誰のための無茶々園なのか?無茶々園でよかったのか?」を組合員に問い、話し合い、人の多様性を認め合い、誰もが生きがいの持てる「日本一、世界一」の無茶々の里を創造したい。そう思っているところです。よく、事業と運動は経営の両輪であると言われる。事業が先か、運動が先か、お金が儲かって、人がついてくるのか、運動や理念があって人や事業がついてくるのか。よく友人と議論します。私は今の時代だからこそ理念(こういう世の中、こうなりたい)に人が共感し、達成するために事業をしっかりとやらなければいけない。そして、多くの人たちが共感する。そんな事業と運動の関係性であるべきではないかと思っています。多くの方たち(都市生活者や世界の人々も)と「共感」し、つながることで少しずつ世の中が変わっていく、地味ではありますが、一人一人が「考える日本人」になれば必ず良い方向に向くのではないのでしょうか!加藤彰彦先生は、「今いるところが世界の中心であり、だからこそ、住んでいるまちに暮らしの種をまこう」と言われました。無茶々園でも5年連続で「これからの10年、20年後の未来の子どもたちのために、小さな多くの種まきをしよう、日本一の町づくり集団を目指そう」と宣言しました。我々の出番なのだと。どうか皆様もこの田舎再生運動に参画して頂き、活力ある日本にしましょう。

無茶々園代表 大津清次





柑橘生産者 宇都宮幸博

平成と言う時代が終わる年になったみたいですね、思春期から壮年期まで駆け抜けてきました。脱サラして農家に何となく就農して周りの人達にお世話になりながら気がつけば無茶々園の代表になりまして、最近時が経つのが早いなーと常々思う今日この頃、それだけ充実した時間を過ごせて居る言う事です・・・ちょっとかしこまりましたか（笑）。以後浜弁ちょいちょいです！平成30年と言う年は今年の漢字にも選ばれた「災」害が無茶々園に降りかかった年やろかな。思い返しちみたら2月の大寒波やろ、あがい長いつらら見たの久しぶりやったけんな。たまげとい。ミカンもやられちレモンは枯れるし、樹に生っちょるやとは生ったまま腐るし。せとかなんか、生っちょるがに雪やけん、がいに苦味が出ちな。ジュースにもならんけん山に捨てに行った人も居ったけんなあ。がいなかったで。浜でも－8℃位になっち隣の卯之町は－12℃以下になっち何処もかしこも水道管が破裂して大変やっとい。まさに今までに無い「災」の始まりやったんかなあ！ほんとで忘れもせん7月7日の西日本豪雨。梅雨時の早朝、携帯の音で起きて消防団の詰所に出ち町内を見ると川は見たこと無いくらいの水位やっち、携帯に住民から「山が崩れよるど」ゆうて見に行くけど、何も出来んゆうことはこうゆう事かと感じながらひたすら土嚢を作って運んで雨が止むのを一日中まったけんな。長く感じたなあの際は。次の日見回り行くとあっちもこっちもミカン山が抜けてこれはいないことになったな思うた。誰に聞いちも「今までに無い雨やっとい」言うたな。

台風も今年は関東の方から来たり最近はミカン収穫前の11月に来たりして大きさも太うなって冷や冷やししながら天気予報見るとや。今年こそは世界に災害や争いが無い年になっちくりよう客人神社に手をあわせませす。



配食サービス てんば屋

今年こそ「てんば屋の後継者を。そして現役からの引退」。あと5年くらいは、今のメンバーで活動を続けていくつもりでおりますが、そろそろ後継者がほしい今日この頃。私たち4人がてんば屋として配食サービスを始めて、今年で12年目。数年後には、自分たちが配食サービスを利用する側になるかもしれません。後継者問題は農業でも課題になっていますが、てんば屋でも同じ。後継者ができ現役から引退した後は、孫の子守り役に就職する予定ですが、何年先になることやら！

柑橘生産者 中村文生

昨年の西日本豪雨では会員様や消費者の皆様の温かいご支援と励ましの言葉をたくさん頂きありがとうございました。土砂崩れによる果樹の倒木や運搬用のラックの破損などまだまだ復旧には時間がかかりそうですが、そこは持ち前の明るさと気力で乗り切っていきます。私の好きな言葉である「志は大に行いは小に」を心に刻み今年も小さいことや当たり前の事をコツコツとやっていく農作業を大事にしていきたいと思います。「志に向かって安全・安心」をモットーに美味しい柑橘を作って皆さんに喜んでもらえるように頑張るぞー！



事務局 芝将史

2018年は各地で西日本豪雨や台風による大きな被害がありました。7月7日の被災から約2週間後の7月22日より無茶々園のある西予市の隣町、宇和島吉田町において「災害ボランティア・農業ボランティア」をしており、今年も継続して活動します。仕事では、2019年は「生産者の意見を出荷業務メンバーに伝える、出荷業務からの意見を生産者に伝える」ことを決意します。主に集荷（柑橘の運搬）を担当していますが、集荷をするだけでなく生産者とのコミュニケーションを大事にしていきたいです。

無茶々園の今年こそ

百笑一輝 前田寛明

㈱百笑一輝は地域福祉事業を展開しています。今年で設立から5年が経ちますが、地域の方々が気軽に困りごとを相談できる総合福祉拠点づくりを地域の方々と協働でつくりあげようと日々邁進しています。昨年12月には、最期までいきいきと住み慣れた地域で暮らしていけるよう、できるだけ長く自宅で自分らしく過ごすことができるように、リハビリ（機能訓練）を中心にしたデイサービスセンター「こはるの里」を開所しました。デイサービスセンターは、「めぐみの里」「海里」に続いて3軒目となり、地域の方々の様々な要望に応える居場所づくりを始めたところです。また、昨年は4月から西予市委託事業の学童保育「おれんじクラブ」が明浜中学校の空き教室で始まりましたが、7月の西日本豪雨災害による裏山崩壊の土砂が流れ込み、以前使用していた集落施設2階での再出発となりました。私の住んでいる大洲市も浸水被害を受け、見慣れた風景が一変する体験をし、普通に暮らせることの有難さを改めて感じました。今年の干支は「亥」、私は年男なので、年神様のご加護を多く受けて、今までにしていないことをし、行っていないところに行き、嫁さんと愛犬といろんな思い出づくりができたらと思います。皆さんにとっても良い年になりますように。



真珠生産者 二宮祥子

工場では4日から仕事ははじめ、当年物の珠出しがはじまります。昨年は豪雨による赤潮被害や人手不足に見舞われ、あこや貝も幾多の困難や試練を乗り越え成長し、大きく美しい真珠になってくれました。思い、感謝は入です。私も二人のおしゃべり娘を育てながら身も心も成長中ですが、一日一日がこれほどまでに忙しく、予定通りにいかないものかと身に染みております。会社復帰してからの育児との両立は本当に大変なものです。でもそこから学ぶことも多いです。私の性格上、人に頼ったり、任せたりするのが苦手でした。でも頼らなきゃ生きていけない現状でジレンマもありました。しかし会社の指揮者としては、ある程度社員や同僚を頼ることも必要かとも気付きました。そのことで役割を共有でき、人材育成や新しいアイデアも生まれています。私は勉強嫌いでしたが持ち前の発想力と行動力では親に褒められたこともありました。最近では、社会で素晴らしく活躍される人や、世代の違う人とのコミュニケーションが私の何よりの教材です。これからも自分のアイデアを信じ、たくさんの人を巻き込んで。いやっ。頼りに。その人脈と知恵をお借りして突き進んでいきたいです。まずは今年、以前からやりたかった真珠製品の出張販売と出前授業で四国を出てみたいなと思います。



てんば印 酒井朋恵

英語の勉強をしよう、フルマラソンに挑戦、本を読もう、楽器を弾こう・・・と思い立ち、気づけば家は綺麗なままの本や道具で溢れている。今年こそは断捨離しよう！なんて何年も言っているような。今年は「今年こそ！」をなくしたい。農業も趣味も1つずつ確実に進めたい。でも、やはり願ってしまうのは、今年こそ災いがない年になりますように。カメムシが発生しませんように！そして、皆さまにとって良い年になりますように！！



事務局 兼 柑橘生産者見習い 宇都宮広

新年の誓いを考えてみた。今年こそはと新たな抱負を抱くことは大切な事です。また、これまでやってきた事を継続することも、もっと大切な事。一方、もうやらないという事を決めることも大切な事かもしれない。大切だと思ってやってきた事が本当はあまり重要でなかったり。何が大切で、何が重要でないのか整理する事が一番重要なのかも。当たり前のことを当たり前にする。これが一番なのかも。さっ、畑に行こう。

柑橘生産者 片山奈津子



今年の目標。片山農園みかん部としては苗木を昨年に引き続き大きくしよう！と。昨年発足したチョコ部は安定した商品化を確実に。カカオ生豆から作る本格ホームメイドチョコレートは好評ですが、安定した供給体制はまだ難しい。子育て部は3歳模倣の時期に突入した息子のために真似されてもいいような人間になること。そんなのはもっと難しい。でもまさに天から与えられた絶好のチャンスと思い、「お母さん、魚作れないもんね。」の息子の言葉が妙に悔しいから刺身作れるようになるぞ！その一連の動きから有言実行や自分を見つめ直すこと、真似してほしいですね。息子よ、母の背中を見て大きく育て！

わかめ生産者 伊藤宗和

2019年はまず復興です。昨年7月の豪雨災害による土砂崩れで自宅が全壊。作業場は無事でしたが、周りに土砂が残っていたことなどもあり、塩蔵わかめの製造ができませんでした。ようやく再開できたのが11月。いまままだ被災前には程遠い状態にあります。土砂が海に流れたことによる影響もまだわかりません。ですが、ここでわかめを植えて育てることは続けていきます。昨年の分まで今年はみなさまにお届けできるよう努めていきます。

被災から現在の暮らしについて

無茶々園の塩蔵わかめは宇和島市吉田町奥浦地区にある伊藤水産で製造しています。昨年7月の豪雨により土砂崩れが起き、この地は大きな被害を受けました。7月7日土曜日の朝、大雨により自宅すぐ裏山の土砂が自宅まで流れ、慌てて外に出たところあつという間に大きな音と共に土砂崩れが起き、一気に家を抜け向かいの道路まで流れていったそうです。第一波目で大きな土砂崩れが来ていたら死んでいたかもしれないとぞっとしたという言葉は、とても重く感じました。土砂崩れにより自宅は全壊。わかめの作業場は被害を免れましたが、吉田町は断水が続き、塩蔵わかめの製造どころか日々の生活もままならない状況が続きました。8月に水道は復旧しましたが、周りには土砂が残り、被災申請の手続きにも追われました。作業場回りの土砂が撤去されたのが9月。10月に試験的に製造をはじめたものの、台風の接近によりその対策に追われることもありました。ようやく本格的に再開できたのは被災から4か月後の11月でした。今もまだ被災前には程遠い状態にあります。土砂崩れのあった裏山は今も少しずつ崩れてきています。目に見える範囲での土砂が撤去され、報道されることはほとんどなくなり、復興したように見えるかもしれないがまったくそんなことはない伊藤さんと言います。土砂とともに海には過剰に栄養素が流れ出したことで、今後どのような影響が出るかもまだわかりません。ですが、ここでわかめを植えて続けていくと伊藤さんは力強く言います。わかめを養殖することで、海の緑化活動に繋がり、プランクトンや小魚が集まり、豊かな漁場が作られます。この海が後世に続くよう、昨年の12月にはわかめの種付けも行われました。2～3月頃にはこのわかめの収穫を迎えます。災害にも負けない宇和海のわかめ、ぜひご賞味ください。